

## 活動報告

## 「学生が変える日本大学」3章 —「日本大学 学生FD CHAmmiT 2016」における取り組み—

太田 翔<sup>\*1), 2)</sup>, 久木亘佑<sup>1), 3)</sup>, 橋本茉莉加<sup>1), 4)</sup>, 徳田萌乃<sup>1), 5)</sup>, 大木秀俊<sup>1), 6)</sup>  
 建部弘輔<sup>1), 7)</sup>, 新井洋祐<sup>8)</sup>, 岩田雄真<sup>9)</sup>

<sup>1)</sup>「日本大学 学生FD CHAmmiT 2016」学生スタッフ, <sup>2)</sup>日本大学商学部会計学科3年,  
<sup>3)</sup>日本大学法学部法律学科4年, <sup>4)</sup>日本大学法学部新聞学科4年, <sup>5)</sup>日本大学文理学部国文学科3年,  
<sup>6)</sup>日本大学国際関係学部国際総合政策学科3年, <sup>7)</sup>国際関係学部国際総合政策学科4年,  
<sup>8)</sup>日本大学生産工学部機械工学科4年, <sup>9)</sup>日本大学生物資源科学部生命化学科4年

本稿は、日本大学における「日本大学 学生FD CHAmmiT 2016」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果から、学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べたものである。

「日本大学 学生FD CHAmmiT 2016」は、一般的な学生FDイベントと異なり、様々な学部から成り立っている日本最大規模の総合大学だからこそできる“日本大学独自の学生FDサミット”と言える。平成26年2月26日に開催された第1回目の「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」から今回で4回目を迎えた。本活動報告が、今後日本大学の「学生FD活動」を更に発展させることを期待する。

キーワード：FD (Faculty Development), 学生FD, 「CHAmmiT 2016」

### はじめに

「日本大学 学生FD CHAmmiT」(以下「CHAmmiT」とする)とは、簡潔に言えば、「学生FDサミット」の「日本大学版」であると言える。「学生FDサミット」は、全国の大学から参加者が集い、毎年春、夏の2回開催される。開催校の特色を活かした企画を通して、「教育」について語り合う場となっており、十分な知識を持つ参加者もいる。また、各大学(団体)の活動報告の場という性質も持つ。このように、学生FDサミットの参加者は、「学生FD」に既に何らかの形で関わっている人が多い。

一方、「CHAmmiT」は例年、特に学生は初めて参加する人の割合が高い。そのため、「CHAmmiT」においては、「初めて参加した人でも理解でき、興味を持てる」ような企画を考えなければならない。

このような背景のもと、2016年3月12日(土)から13日(日)に、本学文理学部を会場に「学生FDサミット2016・日本大学 学生FD CHAmmiT 2015」が同時に開催された。参加大学は68校、556人の参加者が一堂に会した。「キャンパスを彩る三原色」を全体テーマとし、それぞれの大学における学生・教員・職員の三位一体の在り方を模索した。そして本学での「学生FDサミット」開催を経て、他大学から得た知識を踏まえたことにより「CHAmmiT 2015」は確実に次の段階にステップアップしたように感じている。

## 1 「CHAmmiT 2016」開催までの流れ

本節では、「CHAmmiT 2016」当日及び開催に至るまでの概要について、実施報告を通じて述べる。

4月上旬から5月上旬に学生コアスタッフ8名が選出され、6月上旬より企画・運営の主軸として活動を開始した。学生スタッフは、各学部等から公募枠8名と推薦枠17名が選出され、10月上旬より学生コアスタッフと協働し、企画・運営の準備・当日の運営を行った。

今回の学生コアスタッフは、前回の「CHAmmiT」から学生コアスタッフや学生スタッフを経験した者が多く、一方で、どちらも経験したことのない者の参画が少ない状況であった。

学生コアスタッフミーティングとは、学生コアスタッフのみで行うミーティングのことであり、開催までに企画検討合宿を含めて5回行われた。企画の骨子を完成させ、学生スタッフに共有するための方法を検討した。どのような狙いで今回の「CHAmmiT」を開催しようと考えているのか、学生コアスタッフ間でも考えを1つにまとめていく必要があった。学生コアスタッフと学生スタッフとの間には上下関係をつくらないことは最初の方針で決定していたが、学生スタッフの疑問点や不安を解消するのは、他でもない学生コアスタッフである。そのような関係を目指した次第である。

結果として、学生スタッフミーティングでは役割別ミーティングに費やす時間が増え、学生コアスタッフだけでは検討しきれなかった企画内容をより細部について検討した。学生スタッフには、ファシリテーション研修・実践をとおして、しゃべり場の雰囲気慣れてもらい、彼らの視点を取り入れるため、分かりにくかった点や、やりにくかった点を積極的にヒアリングした。

### 1-1 第1回学生コアスタッフミーティング（平成28年6月4日）

始めに、「学生参画型FD活動」について職員スタッフより説明があり、次に、前回学生スタッフの経験者である学生コアスタッフが、「学生FDサミット2016・CHAmmiT 2015」についての体験談を発表した。説明・体験談の内容を共有することで、学生スタッフ未経験者の学生コアスタッフにおいては「CHAmmiT」のイメージをとらえることができ、また「CHAmmiT 2016」の企画にそのイメージを活かすことができた。続いて、自己紹介を含む「プチしゃべり場」を実施した。しゃべり場を体験することにより、学生コアスタッフ及び教職員スタッフとの距離を縮めるとともに、ファシリテーターの役割やしゃべり場の雰囲気を学ぶことができた。最後に、役割の分担を行った。「学生FDサミット2016・CHAmmiT 2015」の事後ミーティングにおいて、学生コアスタッフと学生スタッフ間のコミュニケーション不足が指摘されていた。この課題は、前回の学生スタッフを経験した者が多かったからこそ、解消すべく検討する必要があった。そのため、今回の学生コアスタッフ8名の役割分担は以下のとおりに決定した。

「代表」(1名) 学生スタッフの総括。外部交渉。全部門の補助。

「副代表」(2名) 代表のサポート。企画運営、広報資料、総務との連携。ミーティングの進行。

「企画・運営担当」(2名) 企画の立案・検討。企画内容決定後は、当日の運営面の検討。

「広報・資料担当」(2名) 参加者募集のポスター作成。当日参加者に配布する資料の作成。公式Facebookなど参加を促すための広報活動の検討、実施。

「総務」(1名) ミーティング内容の記録。学生コアスタッフと学生スタッフとの連携の促進。

「副代表」は前回の1名から2名に増やした。「企画・運営担当」及び「広報・資料担当」には、代表・副代表を設けなかった。これは、肩書きに固執せず、担当以外のメンバーとの意見交換を積極的に行い、連携を深めた方が良いと考えたからである。そして「総務」は、前回の反省を活かすために設けられた。10月以降に合流する学生スタッフと円滑にコミュニケーションを図ること、また、学生コアスタッフで検討して

きた内容を記録・報告することを重視した。

### 1-2 第2回学生コアスタッフミーティング（平成28年7月2日）

第2回ミーティングでは、初めに「CHAmmiT 2016」当日までのスケジュールの確認を行った。「学生FDサミット2016・CHAmmiT 2015」のスケジュールを参考に、各担当の作業到達の目安とした。次に、「CHAmmiT 2016」の目標について意見交換をした。「CHAmmiT 2016」の企画を通して参加者に対し「何を不得、気づいてほしいのか」という点にフォーカスし以下のとおり目標を定めた。

目標「学生FDに触れ、授業に対する意識の変化を通して、日本大学への帰属意識を高める」

参加者に期待することとして、①参加者に学生FD活動を知ってもらうこと。②企画を通して、授業や大学での学びに対する意識の変化を起こしてもらうこと。③学部の枠を超え、様々な学部の人と接することで日大の一員であることを再確認し、帰属意識を高めてもらうこと。目標を含めて以上4点を基本方針とした。

最後に、「CHAmmiT 2016」のキャッチフレーズを検討した。キャッチフレーズは、「YOUは何しに日大へ？～ほくらが創る理想の学び」。参加者に日本大学について考えてもらいたいという想いと、その時点の企画内容としてシラバスを創る案が出ていたため、それに関連した内容をサブタイトルとして入れることにより、参加者に今回の「CHAmmiT 2016」に具体的なイメージをもってもらおう趣旨で考案した。

### 1-3 学生コアスタッフ企画検討合宿（平成28年8月1日・2日）

企画検討合宿は、日本大学軽井沢研修所で行われた。企画・運営担当の学生コアスタッフから「CHAmmiT 2016」企画案のプレゼンテーションを行い、企画案の決定と運営についてディスカッションした。企画内容としては、①オープニング、②しゃべり場、③エンディング・トークセッション、④懇親会となり、「①オープニング」は、企画説明としゃべり場の方法に関する説明などは、例年と比べ、シンプルかつ必要な内容のみにまとめることに決定した。参加者にとって、多くの説明を受けるより、実際に体験した方がより「学生FD」の理解につながると考えたからである。「②しゃべり場」は、今回の「CHAmmiT 2016」のメイン企画として第2回コアスタッフミーティングで提案があった、「理想の授業を創る」をテーマにしゃべり場を通してシラバスを作成することに決定した。理想の授業を考えるにあたり、参加者が既存の授業の良い点・改善点を見直すことができ、学部間、学科間で交流することにより新しい視点に気づくことができると考えたからである。「CHAmmiT 2016」の目標に基づいており、本学における学生FD活動の一環として深い関わりがある為このテーマを掲げた。

しゃべり場の構成は以下の通りである。

- 1 学部ミーティング① 「学部あるある」アイスブレイクを含む
- 2 オール日大ミーティング① 「自学部自慢」
- 3 学部ミーティング② 「理想の授業」
- 4 オール日大ミーティング② 「発表」

「③エンディング」では、参加者に今回の企画を通じて体験したことが“実は学生FD活動の一つである”という“種明かし”を行い、参加者に“気づき”を与えることとしたい。そして、トークセッションに移り、本学における学生FD活動を実際に行っている団体及び学部による活動紹介を行い、参加者が所属学部で学生FD活動を行うきっかけを作りたいという思いでエンディング・トークセッションを企画した。

次に、広報活動について意見交換をした。芸術学部の学生スタッフの協力により、「CHAmmiT 2016」のポスターについては、当該学生スタッフのデザインをポスターとして使用することに決定した。また、

「CHAmmiT」イメージキャラクターの“フラワードックくん”の提案があり採用すると合意した。そしてTwitter, FacebookなどSNSを利用し、活動報告を行うことで多くの人へ周知し、その活動報告をもとに意見を集め更なる活動の広がり期待し、実施をすることにした。宣伝の向上のためポスターとともに、「CHAmmiT」とは何かを多くの人へ知ってもらうため、各学部等に設置し配布するフライヤーの作成も決定した。

続いて、全学FD委員会プログラムWGリーダー河相教授によるKJ法・ファシリテーションについて講義が行われた。その後ファシリテーション実践を行った。ファシリテーターの経験がない学生コアスタッフがファシリテーターとなり、しゃべり場におけるファシリテーターの役割及びファシリテーションの心得の理解を深める目的で、①グループへの気配り、②中立的立場、③対話の軌道修正の3点について意識して取り組んだ。

企画検討合宿を終え、「CHAmmiT 2016」のおおよその企画の骨子が構築できた。

#### 1-4 第3回学生コアスタッフミーティング（平成28年9月17日）

第3回ミーティングは企画検討合宿において検討が十分なされていない「CHAmmiT 2016」当日のタイムテーブル及び役割分担について検討した。今回のタイムテーブルは、メイン企画であるしゃべり場を充実させるとともに、企画ごとのつながりに統一性をもたせることで、今回の「CHAmmiT」全体を通して参加者の「学生FD活動」への理解を向上させることを目的とし、タイムテーブルの作成を行った。

次に、企画及び運営に関する役割分担について検討し、以下の通り決定した。

- ・オープニング・エンディング班（1名） オープニング・エンディングの運営，司会原稿の作成。
- ・トークセッション班（1名） トークセッションの運営，各学部・団体に登壇の依頼。
- ・しゃべり場班（2名） しゃべり場の運営，ファシリテーションマニュアル作成，しゃべり場に関する資料作成。
- ・資料作成班（2名） 当日配布するパンフレットの作成。
- ・広報活動班（2名） SNSによる活動報告，宣伝活動。
- ・懇親会班（1名） 懇親会の運営。

以後、学生スタッフと共に上記の班別で当日までの準備を行う。

#### 1-5 第1回学生スタッフミーティング（平成28年10月1日）

このミーティングから学生スタッフも加わって活動を行う。初めに学生コアスタッフによる「CHAmmiT 2016」の企画の説明、ファシリテーション研修を行った。次に、当日学生スタッフはしゃべり場のファシリテーターを担うため、しゃべり場を行い、早速ファシリテーション実践を行った。学生スタッフのほとんどがしゃべり場を経験したことがない状況であり、初めは意見があまり出されなかったが、徐々にしゃべり場の雰囲気が変わり活発に意見が飛び交うようになった。続いて、前回の学生コアスタッフミーティングで決定した役割班に学生スタッフを分担し、企画について各班に分かれてミーティングを行った。その際に実施計画書の作成も行った。実施計画書は、主に当日のプログラムについて「事前準備」と「当日の進行・運営」の視点から提示したものである。「事前準備」では、当日に必要な資料を誰がいつまでに作成していくか、当日必要な備品を記入した。また、当日のタイムテーブルをさらに細分化し、時間ごとにスタッフはどのような動きをしてほしいのか、企画の具体的実施内容を一覧に示した。

#### 1-6 第2回学生スタッフミーティング（平成28年11月5日）

第2回学生スタッフミーティングは各学部等の文化祭の時期と重なり、学生コアスタッフ及び学生スタッ

フの参加率が半数程度で、進行しにくい状況であった。初めに、前回の学生スタッフミーティングでの復習としてファシリテーション研修を行った。ここで「ファシリテーションマニュアル」(当日のファシリテーションを行う学生スタッフの為の行動指針)、「オール日大ミーティング②」における発表方法を共有した。発表方法は、「学部ミーティング②」で作成したシラバスを印刷して各自に配布し、それを用いて「オール日大ミーティング②」で各自発表を行う方法(以下“個人発表”)とした。また“個人発表”の時間配分について指摘があり、第4回学生コアスタッフミーティングでの検討事項となった。

次に、スケジュールの都合で、急遽しゃべり場実践を2回行うことになった。1回目のしゃべり場では「学部あるある」をテーマに行い、2回目は「理想の授業」をテーマにしゃべり場班が作成した“シラバス作成の見本”をもとにシラバス創りを行った。2回とも学部混在のオール日大ミーティングと同じグループ構成となったが、本来学部ミーティングを想定したテーマ設定ではあったものの、あるグループは学部をひとつ選択して、その学部を想定して意見をまとめシラバスを作成し、別のグループでは、あえて学部を特定しない状態でシラバス作成をする2つのパターンでしゃべり場が進行した。結果として、1つの学部を想定してしゃべり場を行ったグループは想定した学部の特化した授業が完成し、その他のグループは学部間の特色を取り入れ多様性に富んだ授業が完成した。当日に近い状況でしゃべり場を実施し、しゃべり場の時間配分とファシリテーションの方法について確認することができた。

#### 1-7 第4回学生コアスタッフミーティング(平成28年11月26日)

第4回ミーティングは実際の会場となる法学部にて行った。初めに、当日のしゃべり場で使用する教室及びオープニング・エンディングで使用する講堂の視察を行った。教室移動の時間、学生スタッフの配置など細部についてイメージをすることができた。次に、各班の実施計画書を共有し、企画の最終確認及び当日使用するパンフレット案の内容確認を行った。第2回学生スタッフミーティングで懸案事項として挙げられた“個人発表”の時間配分について検討した。すでに各企画とも時間配分がタイムテーブルで決まっており、短縮することが困難だったため、全体のタイムテーブルは変更せず、しゃべり場内で時間を調節し、対応することに決定した。続いて、最終的なしゃべり場のコンセプト及びテーマを検討し、以下の通り決定した。

- ・学部ミーティング①「自学部のお気に入りの授業」

単なるアイスブレイクに留まらず、参加者がより具体的に「CHAmmiT」の目的を理解できるように促す。自学部の授業やカリキュラムの特色を整理するなど「現状を把握する」ための時間とする。

- ・オール日大ミーティング①「自学部自慢」

学部ミーティング①で話し合ったことを他学部と共有する。他学部と自学部とを比較することで、改めて自学部の魅力、改善点に「気付く」ための時間とする。

- ・学部ミーティング②「あったらいいな、こんな授業」

2回のしゃべり場で得た自学部の特色を活かし、自学部の魅力を再発見できるような授業企画(シラバス)を実際に「創る」時間とする。グループでの話し合いをとおして、何を学ぶために日本大学へ来たのか、これからどのような姿勢で大学での学びを深めていく必要があるのかなど、個人レベルでも改めて気付きを与えられるようにしていく。

- ・オール日大ミーティング②「個人発表」

「学部ミーティング②」で作成したシラバスを発表する時間とする。アイデアをアウトプットする時間を取ることで参加者に参加意識を持たせるためである。また、他学部との情報共有、意見交換の場となることを期待した。

最後に、視察をもとに当日の全体の流れについて最終確認を行った。

### 1-8 第3回学生スタッフミーティング（平成28年12月3日）

最終回のミーティングとなる第3回ミーティングは、当日に向けて改めて企画内容や第4回学生コアスタッフミーティングで決定したしゃべり場のコンセプトを学生スタッフと共有すること、タイムスケジュールに沿って各企画を確認することにより、今回の「CHAmmiT」の趣旨を改めて見つめなおし、当日のイメージを膨らませていくことを目的とした。始めに、企画の全体像及びタイムスケジュールを学生スタッフに共有した。次に、しゃべり場班が作成した“シラバス作成見本”，“ファシリテーションマニュアル”をもとにしゃべり場でのシラバス作成のコツ及びファシリテーションの方法についてスタッフ全体での最終確認を行った。

### 1-9 前日リハーサル（平成28年12月17日）

準備では、まずしゃべり場で使用する各教室の設営を行った。各階に担当を定め、当日使用する資料のセット、机・椅子の設営、班ごとの備品の設置を行った。次に、オープニング・エンディングで使用する法学部1011講堂の設営を行った。特に設営では、学生スタッフとの連携に重点を置き作業を進めた。作業の進捗状況を共有し、作業が遅れている班については人員を増やし作業効率の向上を図った。続いて、全体ツアー（当日の流れ、ファシリテーターの動き、会場について各教室を巡り全員で確認する作業）を行った。ここでは、しゃべり場で使用する資料の説明を行いしゃべり場の流れについて確認した。その後、当日の運営について各係の役割分担の確認を行った。当日は受付係、誘導係、ステージ係、トークセッション係、懇親会係に分かれ行動をする。最後に、係別に作業を行った。受付・誘導・懇親会係は各階にポスター等の掲示を行い、ステージ係は当日使用するパワーポイント、オープニング・エンディングの進行の確認、照明など細部の確認を行った。同時に、学生スタッフミーティング欠席者のフォローのため、ファシリテーション研修を実施した。

リハーサルは全体を通してスムーズに進行することができ、残りは当日を迎えるのみとなった。問題点としては、リハーサルの段階で当日の学生スタッフのインフルエンザや他行事による欠席者見込みが数名出たことであった。しゃべり場のグループの数と学生スタッフの数が足りなくなることになったため、不足となることが予想されるファシリテーターの補てんを検討しなければならなかった。運営について若干の不安を残した状況であった。

### 1-10 「CHAmmiT 2016」当日（平成28年12月18日）

当日ステージ係は8:30に集合し、オープニング・エンディング及びトークセッションの最終調整を行った。トークセッションにおいて登壇する4学部の学生も参加しリハーサルが進められた。リハーサルは受付開始直前まで続き、細かい修正を繰り返し行った。そのほかの学生スタッフは9:00に集合し、設営状況、受付の確認を行った。学生スタッフの出欠確認も行われ、前日のリハーサルでの不安要素であった、ファシリテーターの補てんについては、学生コアスタッフ4名が対応することとなった。いよいよ9:50から参加者の受付を開始した。

今回は、亜細亜大学からの見学の申し出があったため同大学の学生及び教職員がオブザーバーとして参加した。本学のFD活動に興味を持っていただけたこと、しゃべり場を通して交流できたことはとても良い刺激になった。今後、CHAmmiTや学生FDサミットなど多くの場面で交流し、互いの「学生FD活動」がさらに活発化するよう相乗効果を生まれることを期待したい。

当日のタイムテーブルは以下のように進行された。

### 10:30～11:15 オープニング

オープニングではFD推進センター長加藤直人副学長からの開会のご挨拶の後、CHAmiTについて解説、企画説明を行った。先にも述べたが、今回の「CHAmiT」はしゃべり場の体験と、その後の“種明かし”による“気づき”を得ることを目的としているため、あえて「FD活動・学生FD活動」の具体的な内容には踏み込まず概要のみ説明し、しゃべり場が行われる各教室に移動を行った。

### 11:30～12:20 学部ミーティング①「自学部のお気に入りの授業」

最初のしゃべり場となる「学部ミーティング①」では、昼食を摂りながら自己紹介し、「自学部のお気に入りの授業」について意見交換した。事前にファシリテーターからシラバス作成を主旨としていることを伝え、主な内容はおすすめの授業・ゼミについて意見が挙げられた。中にはなかなか意見が出てこないグループもあったが、ファシリテーターが、サークル活動、学食の話など、話題を提供することにより、和やかな雰囲気を作り、そこから授業内容に話題を転換させ、シラバス作成に必要な意見を拾い上げていくことができた。どのグループも「学部ミーティング①」の段階から緊張がほぐれしゃべり場を楽しんでいるように見受けられた。ファシリテーターの話題の提供について、“ファシリテーションマニュアル”に記載されていたことの多くをファシリテーターが実践することで、しゃべり場を円滑にスタートすることができた。

### 12:30～13:10 オール日大ミーティング①「自学部自慢」

「オール日大ミーティング①」では、「学部ミーティング①」で話し合った内容をもとにしゃべり場を展開した。他学部の学生と交流し、自学部には無い授業形態や学修分野についてグループ全体で共有した。例えば、文系の学部には実験は無く、授業クラスがない学部があるかと思うと、科目によっては生き物を扱う授業、作品を創る授業、校外に出て調査をする授業があるなど学部学科ごとに多様な色が存在する。参加者の多くは所属学部には無い様々な意見や考え方に刺激を受け、深い関心をもって耳を傾けていたことは大きな成果であろう。

### 13:25～14:45 学部ミーティング②「あったらいいな、こんな授業」

「オール日大ミーティング①」で改めて気づいた所属学部の魅力や他学部から得たシラバス作成に必要な情報を踏まえ、シラバスの作成に取り組んだ。シラバスに記載する情報をスムーズに取りまとめるグループもあれば、授業形式に過大な意見が交わされ集約することに時間をとられるグループもあった。しかし、結果的にはどのグループも制限時間内にシラバスを作成することができた。作成したシラバスは次の「オール日大ミーティング②」“個人発表”の際に必要となるため、グループごとのファシリテーターがシラバスのコピーを行った。その間にほかの参加者は“個人発表”の練習を行った。「学部ミーティング②」の時間配分について“ファシリテーションマニュアル”において細かく定めていたことと、ファシリテーターのしゃべり場の進行のサポートが実を結び、結果につながったと感じた。

### 14:55～15:25 オール日大ミーティング②「個人発表」

「学部ミーティング②」で作成したシラバスをオール日大ミーティングのグループで発表した。実際に作成されたシラバスを以下に記す。

- ・法学部 「理想国家建設論」
- ・文理学部 「文 VS 理ディスカッション」, 「文理キャリア」, 「真・自主創造～自己満足のススメ」, 「裏・文理学部論」, 「文理学部概論Ⅰ・Ⅱ」
- ・経済学部 「グランドデザイン演習」

- ・商学部 「スティーブ・ジョブズ論」
- ・芸術学部 「合コン基礎演習」, 「日大ビフォーアフター」
- ・国際関係学部 「世界の郷土料理」, 「国際調理学実習」
- ・危機管理学部 「防犯コミュニケーション実習」
- ・スポーツ科学部 「コーチング実習@日本大学保体審」
- ・理工学部 「ホンマでっか理工」, 「理工総合プロジェクト～家をつくる～」, 「理工学部協働演習」
- ・生産工学部 「もの・ことづくり演習」, 「学生創造型未来工房」
- ・工学部 「公園設計」
- ・医学部 「他職種連携」
- ・歯学部 「歯学部生への入り口」
- ・松戸市学部 「初めての付属病院のお手伝い」
- ・生物資源科学部 「NUBS コラボ企画」, 「生物資源フルコース学」
- ・薬学部 「世界の薬剤師」
- ・通信教育部 「地方創生論～住みたい地域ランキング1位にするには？」

ここでシラバスに掲載した「評価方法」及び「授業形式」について分析する。

「文系学部」「文理学部」「理工系学部」「医療系学部」「生物資源科学部」の5つに区分して集計を行った。

- ・「文系学部」 法学部, 経済学部, 商学部, 芸術学部, 国際関係学部, 危機管理学部, 通信教育部
- ・「文理学部」 文理学部
- ・「理工系学部」 理工学部, 生産工学部, 工学部
- ・「医療系学部」 医学部, 歯学部, 松戸歯学部, 薬学部
- ・「生物資源科学部」 生物資源科学部

「文理学部」「生物資源科学部」については、学部特性上、他の3つに区分することが難しかったため、学部単位での集計となっている。①, ②については、1つのシラバスにおいて、複数項目選択可とした。それぞれ記入された部分を反映させている。

この集計結果をもとに各系統でどの項目について重要視しているのか、また、全体の傾向を探る。

### ① 評価方法

文系	平常点	レポート	試験	プレゼン・発表	その他	
	7	6	1	5	7	
文理	平常点	レポート	試験	プレゼン	受講者同士の評価	その他
	3	2		1	2	3
理工系	平常点	レポート	試験	プレゼン・発表	受講生同士の評価	その他
	5	3		4	1	3
医療系	平常点	レポート	試験	プレゼン・発表		
	3	4		3		
生物資源	平常点	レポート	試験	企画	消費者アンケート	
	2	2		1	1	

「平常点」の他に、「レポート」「プレゼン・発表」を選択しているところが多いことが伺える。授業内容も同時に参照すると、講義や他学部から知識を得た後、自分たちのアイデアをアウトプットする機会とし



てプレゼンや発表を設定している。

また、文理学部と理工系学部、生物資源科学部では、受講生同士の評価、消費者アンケートといった、教員以外からの評価も成績に反映されるような多角的な評価方法を選択している。いずれの学部も、学科数が多いことが共通点と言える。多様な学科間に所属する学生はお互いと第三者の意見を取り入れ新たな視点を見出すことを求めていると考えられる。また「試験」を選択しているグループは、国際関係学部の1グループのみであった。しかし、授業内容に注目すると、世界の郷土料理を作る調理実習、食糧問題についてなど、講義、ディスカッションを実施する内容なので、「試験」の比重は大きくない。

## ② 授業形式

文系	講義	実技	実験	実習
	8	1		9
文理	講義	実技	実験	実習
	3	2	1	4
理工系	講義	実技	実験	実習
	2	2	1	5
医療系	講義	実技	実験	実習
	2	1		2
生物資源	講義	実技	実験	実習
	1			2

文系学部では「講義」と「実習」の併用が非常に多かった。理工系も「実習」の割合が高いが、他の項目も選択されている。生物資源科学部は、2グループあったが、いずれも「実習」を選択している。

上記二点の結果をみて、多くのグループが試験など与えられた課題より自ら進んで学び、そこから課題を設定する授業が望まれていることがわかった。そして学びを受ける環境として、基本的に所属各部に由来から実施されている授業形式を採用するケースが多く、授業内容で他学部・他学科間を横断する授業が多く作られる結果となった。

## 15:35～16:40 エンディング・トークセッション

エンディングは、参加者に対し「CHAmmiT 2016」の“種明かし”を行い、参加者に体験したしゃべり場、シラバス作成を通して授業について考えること、これらが「学生FD活動」であることに気づき、実感してもらうという企画とした。続いて、その学生FD活動を実際に行う4学部による、トークセッションに移った。文理学部は「文理CHAmmiT」と「学生発案型授業」の説明を行い、国際関係学部・生産工学部・生物資源科学部の3学部は、活動内容について司会の学生スタッフからの質問形式で発表した。それぞれの発表の後参加者からの質疑応答を行った。「CHAmmiT 2016」を通して、本学における「学生FD活動」を理解し、実際に「学生FD活動」を行う学生の意見を聞き、所属学部に戻り1人でも多くの方が「学生FD活動」を实践できるきっかけにつながることを期待する。

参加者から感想を述べる時間を設け、“CHAmmiTを通して授業がこのように考えられ創られていることを知り、授業に対する意識が変わった”、“なかなか他学部と話し合っ意見述べる機会がないのですごくいい経験になった”、“今この場でここまで多くの人の前で感想が言える機会には他にはなく、とても刺激になった”など様々な感想を聞くことができた。その後アンケートの記入を行った。次に今回見学にお越しいただいた、亜細亜大学の代表者、全学FD委員会プログラムWGリーダー河相安彦教授の講評をいただき、学生FDコアスタッフ代表太田翔による総括、最後に記念撮影を行い「CHAmmiT 2016」は閉会した。その後、

懇親会を行った。懇親会では、「学部ミーティング②」で作成した各グループのシラバスを掲示し、掲示されたシラバスを比較しながら、「CHAmiT 2016」を振り返り、懇談した。

当日は学生・教職員スタッフ及び参加者の協力により円滑に終了することができた。

## 2 参加者アンケートから見る ～「日本大学 学生 FD CHAmiT 2016」～

本節では、本学におけるすべての学部等から学生 133 名・教員 32 名・職員 25 名、合計 190 名が参加し、178 名（回答率 93.6%）から回答いただいたアンケート結果をもとに「CHAmiT 2016」について、参加者の視点から探る。

### 1. 今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

CHAmiT 2013	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	21人	25%	62人	75%
教職員	32人	94%	2人	6%
全体	53人	45%	64人	55%

CHAmiT 2014	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	31人	25%	93人	76%
教職員	49人	98%	1人	2%
全体	80人	47%	92人	53%

CHAmiT 2015	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	24人	25%	78人	75%
教職員	46人	98%	1人	2%
全体	70人	49%	74人	51%

CHAmiT 2016	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	45人	36%	81人	64%
教職員	49人	94%	3人	69%
全体	94人	53%	84人	47%

### 2. 今回のイベント以前に「学生 FD」について知っていましたか？

CHAmiT 2013	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	16人	19%	67人	81%
教職員	22人	65%	12人	35%
全体	38人	32%	79人	68%

CHAmiT 2014	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	29人	24%	93人	76%
教職員	40人	80%	10人	20%
全体	69人	40%	103人	60%

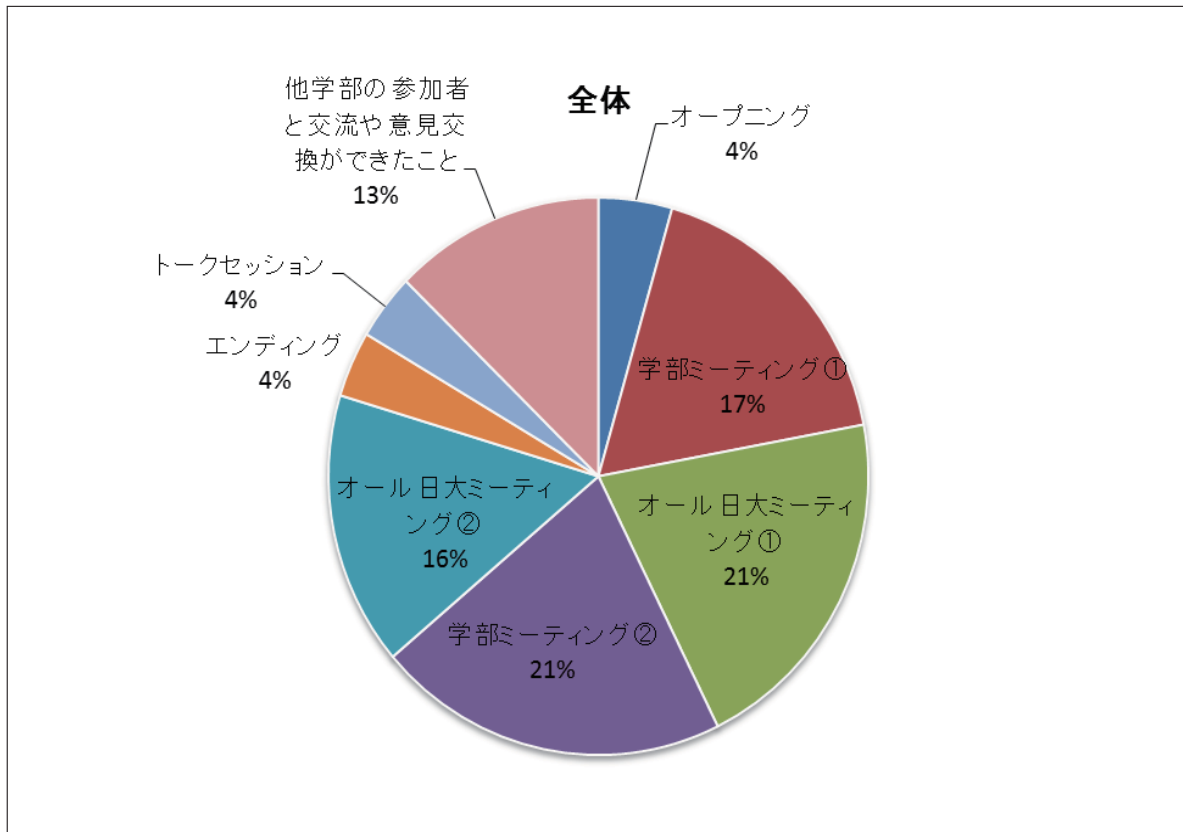
CHAmiT 2015	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	19人	20%	78人	80%
教職員	38人	81%	9人	19%
全体	57人	40%	87人	60%

CHAmiT 2016	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
学生	44人	35%	82人	65%
教職員	47人	90%	5人	10%
全体	91人	51%	87人	49%

上記表は、「FD」と「学生 FD」の認知度について、過去の CHAmiT アンケート結果と比較したものである。例年と比べ認知度は上昇しており、特に学生の「FD」、「学生 FD」の認知度は過去のアンケート結果より約 10% 上昇する結果となった。昨年の「学生 FD サミット 2016」や今回を含む、継続的に行った「CHAmiT」や、近日各学部より「学生 FD 活動」を行う団体が結成され、より身近に「FD」・「学生 FD」に触れるきっかけが増えたこと、「CHAmiT 2016」において Facebook、Twitter など SNS の利用による情報発信及びフライヤーによる宣伝など広告活動に取り組んだことが効果として挙げられる。

今後も様々なアプローチを学部全体に行っていくことが必要である。

### 3. 本日のイベントで有意義であったプログラムはどれですか？（複数回答可）



今回最も多く回答されていたのは「オール日大ミーティング①（21%）」、「学部ミーティング②（21%）」である。例年、学部ミーティング・オール日大ミーティングが回答の多くを占めているが、今回も同様の結果となり「しゃべり場」に対する満足度の高さがうかがえる。「CHAmmiT 2016」のメイン企画として力を入れた部分であるため、その結果が数字に反映されたと考えられる。一方で、トークセッションの満足度が低いことは意外であった。企画側としては、しゃべり場を通して学生FD活動を知り、トークセッションで実例を挙げ、所属学部に戻り、学生FD活動の活発化及び浸透を図る目的であったが、その点については力不足であったように思う。「CHAmmiT」全体としては、各企画にそれぞれ目的があり、その目的を参加者に印象付けるよう今後は工夫していかなければならない。

年々学生・教職員の「FD」・「学生FD」に関する認知度は上昇している。今後はそこから一歩踏み出して、各学部等で学生FD活動を実施できるよう具体的な企画が望まれるように感じた。

## 3 トークセッション参加団体の活動

本節では、CHAmmiT 2016のトークセッションに登壇した3学部についてそれぞれの活動を紹介する。

### 3-1 建部 弘輔（日本大学国際関係学部総合政策学科4年）

国際関係学部FDWGは、2016年に開催された「学生FDサミット」のスタッフメンバーと当時国際関係学部FD担当の安元教授の5人で2015年6月23日に結成された。

主な活動としては、毎週木曜日の9:30から安元教授の研究室での会議と、学部全体しゃべり場の実施を行った。会議では、5人で集まり、しゃべり場の準備や、より活動を国際関係学部を広げるための方法などを検討した。しゃべり場では、2015年10月4日と12月4日の2回、いずれも広く意見を聞くために教員、職員、学生のべ40名の方に来ていただき議論した。

第1回のしゃべり場では国際関係学部らしく、「もっと international にするには？」というテーマで二つのグループに別れ話し合いを行った。主な内容としては、まず「international とは何か？」を議論し、その上で、「どうしたらもっとキャンパスを international に出来るか」についてポストイットと模造紙を用いて話し合った。

第2回のしゃべり場では「あったらいいなこんな授業、出来たらいいなこんな授業」をテーマに話し合った。主な内容としては、「こういう授業があればいいな」という主に授業の内容（ディスカッションやディベートなど）に関しての話し合いを行い、その後、「こういう授業が出来たら良い」という、授業のテーマ（文学、哲学など）について意見を出し合った。このときに意見として出た、「せっかく静岡にキャンパスがあるのだから、静岡県を知る授業が欲しい」という意見は、導入に向け、現在検討されている。

しゃべり場は意見を出して終わりではなく、国際関係学部FDWGメンバーが意見をまとめ、学部長と学務担当の永塚教授に報告及び提出した。

今年度は担当教員の変更や中心となっていた学生の卒業などがあり、十分に活動が出来なかったが、今年のCHAmmitで素晴らしい後継者が国際関係学部に誕生したので、来年、再来年と、活動してもらいたい。

### 3-2 新井 洋祐（日本大学生産工学部機械工学科4年）

生産工学部学生FDは、2016年4月に結成された。メンバーは、「学生FDサミット2016」のスタッフや参加者を中心に結成された。教職員のメンバーは、藤井孝宜教授（応用分子化学科）、加納陽輔専任講師（土木工学科）、教務課の職員の方々であり、三位一体での活動を行っている。我々の学生FDは、FD委員会に属する組織であり、しゃべり場で得た意見をFD委員会に上程するまでが一つの活動になっている。2016年度の主な活動として、CHAmmitへの参加、月に1回のミーティング、年2回のしゃべり場、ファシリテーション研修会を実施した。

また、2016年度が活動の第一歩であったため、自分たちがどのようなスタンスで活動をしていくかを模索する年となった。そして、1年目の年間パッケージとして、「スタートダッシュ充実化計画」と銘打って、活動を開始した。

1月のしゃべり場のテーマは、メンバーや教職員と話し合い、大学生活の中で1年次の学びがとても大切であるという共通意見が出たことから、1年生に着目したものとなった。また、事前にピアサポーター1とのしゃべり場を10月に行い、現在の1年生がかかえる問題点とピアサポーターに1年次の時とを思い出してもらい、当時を振り返っての反省点を抽出した。そして、事前にピアサポーターから得た意見をもとに、1年生へのアドバイスを伝える会も2017年1月にしゃべり場と同日に行った。

また、このしゃべり場を行うにあたり、私たちスタッフが、ただの学生の集まりではなく、ある種のプロフェッショナル集団となるべく、専門講師の方によるファシリテーション研修を行った。2016年度は、一回しか実施ができなかったが、将来的には様々な研修を経験することで、学生FDを行う上での能力を養うと同時にスタッフ自身の能力向上にも力を入れていくことを画策している。

2016年度は、生産工学部学生FD元年であった。2016年度の活動基盤に短期・中期・長期の活動や目標を設定することまでを今年度の活動と設定し、2016年度末に組織のあり方や方向性をより具体化する予定である。

我々の学生FDは、ボランティアという位置付けであると同時に成果も求められる組織である。また、学

生FD活動は、大胆な変革や改革を行っていくものではなく、小さな改善を数多く実施するものである。その意識を持って活動をすることで、学生、教員、職員、そして学部全体にFDの波を広め、大学がより良い教育に触れられる場に変えていくことが我々の使命であると考えている。

### 3-3 岩田 雄真（日本大学生物資源科学部生命化学科4年）

生物資源科学部の学生FDは、主に過去の学生FDサミット・CHAmmiTに参加したメンバーで構成されている。学生FDサミット開催後に行った振り返り会で、学生や教員の多くが「生物資源科学部で何か学生FD活動を行いたい」と意見が出たことから始まった。月に1回程度メンバーで集まり、活動や目指すべき目標などを議論し、「FD活動を通じて、より良い学生生活が送れる環境づくりを目指す。」という目標を立てた。具体的な活動としては、学部内でのしゃべり場開催などの案が出たが、学生FDやCHAmmiTの認知度を上げる事が優先であると考え、学部内での広報活動の一環としてCHAmmiTポスターを作成し、本部が作成した「右も左も日大生」というポスターの横にオリジナルのポスターを掲示した。より目を引くポスターを作成し、興味を持った人に向けて小さなビラを作成し、学生FDやCHAmmiTについての詳細を記した。

次に、授業に焦点を当てた活動を考え授業アンケートに着目した。授業の最終回に行われるマークシートの授業アンケートでは学生の意見をくみ取ることができる反面、授業の最後に行うためその学生にフィードバックすることができない。そこで、アンケート内容を私たちが考え、当該授業の半分が過ぎた時点で実施及び集計する。まず、教員に結果をフィードバックした後、私たちがアンケートの結果を分かりやすくスライドにまとめて授業中に紹介し、教員や学生に授業改善を行うようにした。

最後の授業で再び私たちが考えた授業アンケートを用いて授業アンケートの評価ならびに授業改善の効果があつたかどうかを集計した。

私たちが授業アンケートの作成において留意した点としては、教員だけではなく、学生も主体的に授業改善を図るために工夫をした。例えば、アンケートの中に「より充実した授業にするためにあなた自身がしたいことはなんですか?」という質問項目を用意した。また、授業の中でもう一度説明してほしい点についても学生に聞くことで、学生の理解を深めようとした。

組織団体としてはまだ非公認団体で学生5人と教員2人、職員2人ずつと少数で、FD委員会のもとで活動するのかなどの組織団体としての立ち位置も決まっていない。授業アンケートは試験的に4科目行ったところであるが、今後も学生と教員と職員で三位一体となって活動を継続していきたい。

## 4 学生コアスタッフ～CHAmmiTを通じて～

本節では、学生コアスタッフ5名の視点から「CHAmmiT 2016」を通じて感じたこと、今後の展望について各々述べる。

### 4-1 久木 亘佑（日本大学法学部法律学科4年・CHAmmiT 2016 学生スタッフ副代表）

今回初めて、学生FD活動に参画した。数年前から学生FD活動の存在自体は認識があつたが、具体的な活動について理解をしていなかった。「大学をより良くする」漠然とそんなイメージの中、どのような活動を行っているのか知りたいと思いコアスタッフに応募した。本学の「学生FD」は大学が組織的に取り組んでいるFD活動の一環であり、いわゆる「学生参画型FD」と言われるものである。では具体的な活動とはなんだろう。それは今回で4回目を迎える「CHAmmiT」である。応募当時は「CHAmmiT」の知識も全く

ない状況であったが、学生コアスタッフに選任され、企画・運営に携わることとなり、やる気の反面若干の緊張と不安があった。しかし、第1回コアスタッフミーティングにおいて、教職員スタッフのFD活動についての講演、前回の「学生FDサミット 2016 春・CHAmmiT 2015」で学生スタッフを経験した同じコアスタッフのメンバーからの経験談を聴くことができ、不安は消え去った。また、疑問に思ったことについて真摯に応えてもらえたこと、意見を言いやすい環境であったことは、活動していく上でなにより大きな支えとなった。

CHAmmiT 2016 では資料作成班を担当した。期限のある中で最高のものを作っていかなければならない。“読み手には何が必要なのか”常にそのことを念頭に置き作成にあたった。冊子のデザインは芸術学部の学生スタッフに協力してもらい作成した。それぞれの分野で協働することができるのが本学の強みであると改めて実感した。

CHAmmiT 開催当日は、しゃべり場に参加し同じ法学部の学生と教職員と意見交換を行った。企画について学生・教職員ともに真剣に話し合い、同じ学生でも、部活動・サークル活動や学部祭実行委員など課外活動に取り組んでいる学生もいれば、学問に集中している学生もいて、多様な意見を聞くことができ刺激になった。特に印象に残ったのは、「学部ミーティング②」においてシラバスを作る際に、多様な意見があるなかで「専門知識を学科間若しくは学部間で学びたい」とどの学生も共通して述べていたことである。多くの学生が専門分野に対し自分の学科のみならず、他学科・他学部との交流することにより新たな見地を見出し、学びを追求したい。そんな想いが強く感じられた。今回のしゃべり場を通して所属学部の学びを改めて確認し、他学部の学びを理解し、日本大学における新たな学びの可能性に気づくことができたのではないだろうか。

「CHAmmiT」は学生・教職員が学びについて共に考えるきっかけとなる貴重な場だと思う。今後も引き続き開催し、参加した一人でも多くの方がFD活動を推進するようになることを切に願う。

#### 4-2 橋本茉莉加（日本大学法学部新聞学科4年・CHAmmiT 2016 学生スタッフ企画・運営担当）

私は「CHAmmiT 2014」参加後、所属学部で学生FD活動をやってみたい思いから「学生FDサミット 2016 春・CHAmmiT 2015」の学生スタッフに応募した。学生スタッフになって初めて、学生FDサミットと「CHAmmiT」では、規模も参加者の学生FDに対する認知度・関心の程度も全く違うことを知った。

今回の「CHAmmiT」では主に、企画全体のコンセプトや「しゃべり場」で話し合うテーマ決め、時間配分など運営上の構成を担当した。また、当日しゃべり場の舵取りをするファシリテーターのための「ファシリテーションマニュアル」を作成した。この「ファシリテーションマニュアル」は、当日ファシリテーターを務める学生スタッフに向けて作成した。狙いは、「運営スタッフ」として事前に「しゃべり場」という企画のコンセプトをきちんと理解し、当日のイメージを膨らませてもらうこと、そして実際にどのように参加者に話題を提供していくかという行動指針を示すことである。

「誰が読んでも、しゃべり場の運営ができるように執筆すること」が、このマニュアル作成の最大のミッションであった。企画担当を務める私自身が、スタッフの誰よりも「しゃべり場」という企画の意図を理解することが求められた。

ここで、「学生FDサミット」でのスタッフ経験が活かされることとなる。学生FDサミットで私は、広報・資料班を務めていた。参加者に当日配布する冊子の作成にも携わった。参加者は、冊子だけを頼りに企画に参加する。自ずと、読む側の立場になって必要な情報を載せることが非常に大切であるということになる。

実際に今回のマニュアルでも、加筆・修正を繰り返し、都度新しいマニュアルを学生スタッフに配布し、共有した。ミーティングでは毎回、当日扱うテーマでファシリテーション実践を試みた。説明不足の箇所を書き足したり、時間配分の調整をしたりと苦心した。何より、今回のしゃべり場の目玉企画として定めた「学

部ミーティング②」は、同じ学部同士のメンバーで構成された班で展開する予定のため、ミーティングでシミュレーションできなかったことが不安であった。

一方で、このマニュアルは、学生スタッフをはじめ、教職員スタッフにも熱心に目を通していただいたことで完成させることができたのは言うまでもない。「話し合うテーマに一貫性がない」「テーマが抽象的でイメージしにくい」など、的確な指摘を受けたからこそ、クオリティをここまで高めることができたのだ。

当日は急遽、他学部のファシリテーターを務めたが、私たちスタッフが検討を重ねた企画に対して参加者が真剣に向き合い、各々が大学に対する思いを伝えてくれたことが何よりも嬉しかった。

今後期待することは、学部ごとの学生FD活動の展開だ。私が所属する法学部は3回も「CHAmmiT」の会場となっているが、「学生FD」という言葉を普段学内で聞くこともないし、参加者数も増えていない。難関資格取得や公務員試験に向けて勉学に励む学生がいる一方で、ただ何となく大学に来ている学生もそれなりにいるのが実情だ。

このような「何となく大学に来ている人」に、「CHAmmiT」を知ってもらえれば良いと思う。学部ごとに学生FD活動の展開の程度、学生・教員・職員の関係性に差があるからこそ、「CHAmmiT」での他学部の人とのコミュニケーションが「所属学部の学びの環境への理解促進」や「自身の授業への参加意識に向き合う」きっかけとなるのではないだろうか。

真剣に向き合った分だけ、何かしら新たな気づきを得られるのが私にとっての「学生FD」だ。個性豊かなスタッフに出会えたり、教職員スタッフからも何度も助言、サポートしていただいたことで、自分を少しでも表現する場所を得られたように思う。

#### 4-3 徳田 萌乃（日本大学文理学部国文学科3年・CHAmmiT 2016 学生スタッフ企画・運営担当）

今回で4回目。一言で表せば、「攻めのCHAmmiT」だろう。日本大学で学生FD活動が4学部に広がり、どんどん活発になってきていると感じた。だからこそ今回は「学生FDを知ってもらう」から「学生FDを体感してもらう」へのシフトをしたいと思った。過去のアンケートを見て、より具体的な内容で、所属学部を持ちかえりすぐに活動できるような、そんな目標が浮かんだ。

企画での1番の悩みどころは、正反対の位置にあるものをどうまとめるかだった。例えば、学部が違くと学生FDの在り方は大きく異なること、対して、参加者にはオール日大の帰属意識を持ってほしいこと。学生FDを知らない参加者が多いこと、対してすでに学生FD活動を行っている参加者がいること。2点とも絶対に外せない事であったし、どちらかに寄りすぎでは崩れてしまう。それを均衡に扱える企画を創るのは簡単ではなかった。だがそれを乗り越えられたのは、細かい話し合いのおかげだ。コアスタッフと教職員の方々とのミーティングは毎回刺激的で有意義なものだった。

本番は個人発表であり、参加者には盛りだくさんの内容になったと思う。参加者の悩んでいる顔、笑顔、いろんな表情や「楽しかった!」という声に、「攻めれたな」と1人でにやりとしてしまった。

成功のカギは、積極的な参加者たちと学生スタッフのファシリテーションの力だろう。さらに、ずっと支えてくれていた教職員の皆様、コアスタッフにも感謝したい。コアスタッフが団結できた合宿の夜のわくわく感はずっと忘れない!

最後に、未来のCHAmmiT運営の方々へ。CHAmmiTは、「自主創造」を最大限に体感できる最高の場所です。仲間と出会い、共に考え行動すればきっと素敵な「CHAmmiT」になります。“日本大学らしい学生FD CHAmmiT”を創りあげていってください。

#### 4-4 大木 秀俊（日本大学国際関係学部国際総合政策学科3年・CHAmmiT 2016 学生スタッフ 広報・資料担当）

私は今回初めて「CHAmmiT」の運営の中心となるコアスタッフを務めさせていただいた。参加するきっかけとなったのはゼミの先生からの誘いとFD活動への興味からである。教員・職員・学生が三位一体となって参加するFD活動。初めはあまりよく分からずFD活動経験者のメンバーの皆さんに上手くついていけるのか正直不安であった。そんな私を他学部のメンバーにリードして頂きながら日々の打ち合わせを重ねる中で本番のイメージが少しずつ形成されていった。今回参加して感じたことは沢山ある。その中でも特に人と接すること、つまり「コミュニケーションの大切さ」を実感した。お互い初対面の人とどうすれば上手く話すことが出来るのか？まずは、「あいさつ」だと思う。日ごろ何となく交わしているあいさつが相手にとってどれだけ重要なのかを理解する必要がある。私自身の反省点としてはメンバーとのコミュニケーション不足である。迅速に必要な情報・状況を伝えるべきところを自分が全て背負ってしまうことは他のメンバーの迷惑にも繋がることになる。今後の期待としては学生FD活動の楽しさ・大切さを一人でも多くの方に知っていただくために認知度向上運動等の活動が必要だと考える。FDについて少しでも興味を示された方には是非一度参加してみる価値はあると思う。

私にとって今回のキャッチフレーズ「Youは何しに日大へ？～ほくらが創る理想の学び～」はとても印象に残るものとなり、また参加者自身が真剣に考えさせられるものとなり、改めて残り少ない大学生活を有意義に送りたいと思う。

#### 4-5 総括

太田 翔（日本大学商学部会計学科3年・CHAmmiT 2016 学生スタッフ代表）

今回の「CHAmmiT 2016」は昨年度に引き続き、コアスタッフとして2回目の参加であった。2回目の参加で強く感じたことは、各学部での学生FD活動の活発化である。昨年度に文理学部で開催された「学生FDサミット2016春」及び過去3回開かれた「CHAmmiT」の成果が着実に現れていると考える。団体としては、日本大学の学部での学生FD活動を牽引してきた文理学部学生FDワーキンググループ、生産工学部の学生FD組織が現在設立されている。また、国際関係学部及び生物資源科学部でも団体設立の動きがある。このように「CHAmmiT」を経て、学生FD活動が広まっていくことは、嬉しいことで、今後各学部での活動の飛躍が楽しみである。

「CHAmmiT」では、学生FDについて何も知らない学生の参加者のみなさんにも、楽しみながら多くの気づきを得ていただけたと思う。その様子を見て「CHAmmiT」は、大学を新たな視点で見つめ直す場としての機能も持っていると感じた。私見だが、学生FD活動は、“やらされる活動”ではないと考えている。参加者一人一人の、学ぶ姿勢や意識を変えるきっかけとして果たす役割というのは、必ずしも目に見える成果に結びつく訳ではないが、非常に意義のあることだと思う。これからも、多くの学生、教員、職員の方々に考えるきっかけを提供する場として「CHAmmiT」には継続してもらいたい。

今後の「CHAmmiT」は、例年の要素を含みながらも、徐々に変化が必要になると考えている。先にも述べたように、学生FD活動を行う団体が増え、「CHAmmiT」としてできる活動も幅広くなると予測される。今回のトークセッションのように、より学生FD活動に焦点を当てた企画も取り入れながら、日版サミットとしての「CHAmmiT」へ近づいていくことを期待する。また、「CHAmmiT」は今回で4回目を迎え、参加してきた学生への入れ替わりがある。企画運営を行う学生スタッフの引継ぎ等、継続して開催するための努力も必要である。



## おわりに

何気なく大学生活を送っている中、ふとした“気づき”が生まれ、「CHAmmiT」を通して“気づき”が集まって、やがて参加者一人一人の“変化”へとつながっていくのだと感じた。何も意識することなくただ受けていた講義もそれぞれ目的があり、受講者に何を得られるように講義を展開しているのか、教員がどのような工夫を行っているのか気になるようになった。講義に対する視点が変わった。

筆者自身「CHAmmiT」を経験したからこそ気づき変わることができた。このような場を残すべきであり、一人でも多くの者が変わっていくことができれば「授業改善」がなされるであろう。

今後も本学の「学生FD活動」の発展に期待したい。

## 注

1. 教員の補助として1年生全員の生活や修学をサポートする学部4年生・大学院生のことを指す。

## 日本大学 学生 FD CHAmmiT 2016

### 学生スタッフ一覧

代表	太田 翔	[商学部]
副代表	久木 亘佑	[法学部]
副代表	石澤 翔太郎	[生産工学部]
企画・運営担当	橋本 茉梨加	[法学部]
企画・運営担当	徳田 萌乃	[文理学部]
広報・資料担当	日比野 有里	[芸術学部]
広報・資料担当	大木 秀俊	[国際関係学部]
総務(連絡・記録)	遠山 由理香	[歯学部]

小澤	由佳	[法学部]	齋藤	剛熙	[医学部]
松永	直樹	[法学部]	中西	庸輔	[歯学部]
三浦	沙菜	[法学部]	堀田	瀬奈	[歯学部]
工藤	駿佑	[法学部]	韓	奎香	[松戸歯学部]
手塚	大智	[文理学部]	直江	祐	[松戸歯学部]
大村	一希	[文理学部]	秀島	和	[松戸歯学部]
増田	拓海	[経済学部]	三輪	一樹	[松戸歯学部]
直井	瑞月	[商学部]	中里	日菜子	[松戸歯学部]
池田	和徳	[芸術学部]	宇佐美	乃理	[生物資源科学部]
建部	弘輔	[国際関係学部]	村田	樹紀	[生物資源科学部]
坂上	亮介	[国際関係学部]	小間	貴洋	[薬学部]
黒田	沙織	[危機管理学部]	濱田	潤	[通信教育部]
吉田	楓	[スポーツ科学部]			
藤盛	梓	[理工学部]			
坂本	裕菜	[生産工学部]			
杉山	裕太	[工学部]			

### 教職員スタッフ一覧

河相	安彦	[全学FD委員会プログラムWGリーダー・松戸歯学部教授]
村井	秀樹	[全学FD委員会プログラムWGメンバー・商学部教授]
米山	隆之	[全学FD委員会プログラムWGメンバー・歯学部教授]
八町	斉	[全学FD委員会プログラムWGメンバー・学務部学務課長]
佐藤	香生	[全学FD委員会プログラムWGメンバー・学務部学務課課長補佐]
後藤	裕哉	[全学FD委員会プログラムWGメンバー・学務部学務課課長補佐]
芳	祥子	[全学FD委員会プログラムWGメンバー・学務部学務課主任]